新潟医療センターニュース

第45号
発行
新潟県厚生連労働組合新潟支部
発行責任者
韮澤　仁

放射線科には、検査を行う放射線技師だけでなく、放射線を専門とする医師もいるのをご存知でしょうか。今月号では、当院の放射線科医として活躍される髙橋おがわ先生より、放射線に関する興味深い医療講話を頂きたいと思います。

放射性同位元素を用いた核医学検査装置

皆さんは新潟医療センターの放射線科で検査を受けたことがありますか？　放射線科では画像を撮影する検査を主に扱っています。「放射線科」と言っても放射線を使っていない検査もあるのですが、やはり主流は胸のレントゲンなど放射線を使った検査となるので、現在でも「放射線科」という名称を使用しています。

皆さんは「放射線」という言葉にどのようなイメージを持っていますか？　一八九五年にドイツのレントゲン博士が放射線を発見して以来、現在の医療では、この人体の中が透けて見える便利な道具を使った画像検査が目覚ましく普及・発展してきました。ただ、約二年前に起きた東日本大震災による原発事故以来、放射線の特に被ばくに関しては、国民全体が非常に強く関心を持っている事項の一つとなったと言えます。

日本にはかつて広島と長崎への原爆投下という悲しい歴史があります。これ以降、原爆被爆者を対象とした大規模かつ長期間にわたる調査がなされ、放射線の人体に対する影響は、かなあるのか無いのか証詳細に研究されてきたさ因がだこと門あ明が被う院まりました。それでも、病できなかった事項がの検査で使用するよばこやアルコール、ストレス、紫外線、食品添加物などが複合的に絡まることにより、発がんのリスクが高まるとされています。このように考えると、特に放射線に限ったことでなく、私たちの日々の生活の中では、あらゆる種類の危険と隣り合わせということになってしまいます。私たち医師の立場からは、レントゲン検査が必要と判断した時には、速やかに検査をし、なるべく早期に病気を発見、治療することが患者さんにとって最も有益だと考えています。皆さんの主治医は検査を受けることにより生じる弊害と、検査を受けなかったことにより生じる弊害とを詳細に比較し、常に最適な検査方法を検討しています。なので、これからも安心して放射線科の検査を受けて頂いて大丈夫なのです。

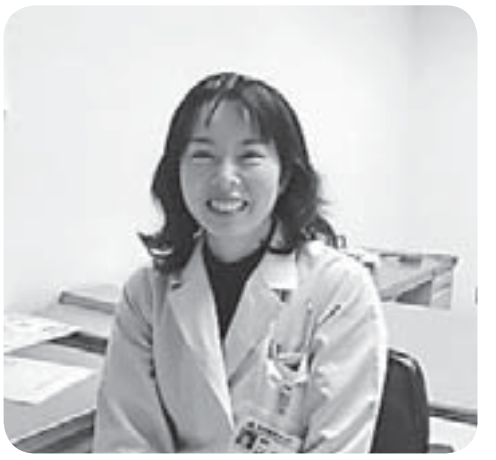
放射線科医は、どんな仕事をするの？

放射線科医は、大きく二つの専門に分かれます。放射線科に関わる様々な検査の診断を行う「放射線診断医」と大きなエネルギーの放射線を利用し、主にがんを治療する「放射線治療医」です。当院の高橋おがわ先生は「放射線診断医」として十四年間の経験を積んだ画像診断のスペシャリストです。

放射線科で行う検査と言っても様々です。ＣＴ検査や核磁気共鳴を利用したＭＲＩ検査、放射性同位元素を利用した核医学検査（RI）、血管造影等といった、高性能コンピュータを有した大型の放射線機器を用いる検査がほとんどです。その為、従来と変わらない放射線の量であっても、得られる画像は莫大です。例えばＣＴ検査で胸から腹部骨盤まで撮影すると、約一五〇枚の画像が得られます。

画像一コマ一コマ隅々まで丁寧に観察し、解析して必要な情報を取り出し、主治医に結果を報告するのが髙橋先生の仕事です。患者さんと直接お話しをする機会は少ないかもしれませんが、新潟医療センターの診断を支える縁の下の力持ち的存在です。

（記事／大橋）



放射線科医　髙橋おがわ

生き生き職員

成長できる自分を楽しみに

みなさんこんにちは。新潟医療センター総務課で働いております一谷朋子です。私はこちらの病院で勤務する傍ら、アルビレックス新潟レディースでサッカーをしています。アルビレックス新潟レディースはなでしこリーグで戦っており、現在六位です。観ている人に何かを感じてもらえるように、また自分たちの目標達成のために、上位を目指し全力でプレーしていきたいです。総務の仕事では職員の白衣や制服といった被服関係の仕事などを担当しています。担当業務をミスの無いよう、できるだけ早くこなすように心がけています。サッカーにおいても仕事においても日々の経験を生かし、少しずつですが成長できることが楽しみです。

最後になりましたが、受け入れ企業としてたくさんのご理解とご支援をいただき大変感謝しています。日頃支えてくださっているサポーターのみなさんや職場のみなさんの応援に応えられるよう、仕事でもサッカーでも、より一層頑張っていきたいと思います。**総務課　一谷　朋子**

ゴールキーパーとして
活躍する一谷さん

佐渡ロングライドに参加してきました

五月十二日早朝。曇り。佐渡島のとある場所が自転車で埋め尽くされました。年に一度のロングライド（自転車でのサイクリングイベント）です。佐渡の海岸線を一周する二一〇㎞コースをメインに四コースが設定されています。この度私は初参加で一三〇㎞コースに参加してきました。

前日から雨の降る中、佐渡に向かいました。受け付けをすませ早々に宿で温泉につかり、佐渡名物の豪華な夕食を食べ、当日に備えました（ちょっと食べすぎました）。

自然豊かな佐渡の海岸線から棚田の脇を通ってコースは進みます。佐渡の海はとても澄んでいてきれいな水色をしていました。また、景勝地大野亀やテレビにも紹介されたZ坂も通りました。

途中の登り坂で左の膝が痛みだし、そこからはゆっくりと登って行きました。やはり一日で長距離はまだまだ身体がついていかないようです。

各地におよそ二〇㎞毎に設置されたエイドステーション（休息所）では、飲み物や地元の特産物を頂きました。特に坂を登った後の塩おにぎりの味は格別でした。

参加賞も頂いたのですが、「朱鷺と暮らす郷」という佐渡産のお米で、減農薬や冬季も水を張っておくなど朱鷺のえさとなる生き物が田んぼにいる環境をつくっているという認証をうけたお米だそうです。

また、朝早くから沿道には地域の皆さんが出ていて、たくさんの声援を頂きました。幼稚園児くらいの子からご高齢の方まで太鼓をたたいてくれたり、手を振ってくれたりと温かな応援でした。

午後三時過ぎに、およそ六時間をかけて無事ゴール出来ました。足腰の痛みや疲労はかなりのものでしたが、それを補ってあまりある達成感がありました。

当院からの参加者は私を含め七名でした。私も来年は体調を整えて二一〇㎞完走したいと思っています。佐渡島が身近に感じた一日になりました。

理学療法士　久保　順一

完走に酔いしれる医療センターチーム
（右端が久保さんです）

職場紹介

■B3病棟

混合病棟として第一歩

こんにちは、B棟3階病棟です。皆さんご存知の通り、今年四月に病棟再編成があり、内科・糖尿病内科・消化器内科・外科病棟より内科・糖尿病内科・皮膚科・眼科・形成外科へ再編成となりました。そして六月から新たに呼吸器内科が加わる予定です。また同時期に患者さんの大移動があったのはもちろんのこと、約半数の職員の異動もありました。そのため当初は慣れないことも多く、毎日ドタバタ状態で落ち着きがありませんでしたが、新体制で三ヶ月目に入り、やっとこのごろ安定期に入ったのか、落ち着きを取り戻してきています。

混合病棟となり、私たちに求められる知識・技術が多様にわたり毎日勉強の連続ですが、どんな状況でも患者さんや、そのご家族に対し安心できるような看護を提供できるよう心がけてまいります。そして、B3病棟に出入りするドクター達についてですが、皆、患者さんやご家族に対し心優しく接しており、頼もしい存在です。こんなB3病棟ですが、これからもよろしくお願いいたします。

編集委員　加藤　咲子　下妻　康子　佐藤　修司　友田　理　佐藤　美穂
小柳　良明　阿部　真由美　吉川　博子　韮澤　仁　大橋　利弘